

アームストロング砲

司馬遼太郎



講談社



アームストロング^{ほう}砲

し ば りやう た ろう
司馬遼太郎

© Ryotaro Shiba 1988



講談社文庫

定価440円

1988年11月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願い
いたします。(庫一)

ISBN4-06-184329-X (0)



講談社文庫

アームストロング砲

司馬遼太郎

講談社

目次

薩摩淨福寺党	七
倉敷の若旦那	三五
五条陣屋	七七
壬生狂言の夜	一〇九
俠客万助珍談	一四七
斬つてはみたが	一七一
大夫殿坂	二〇三
理心流異聞	二四三
アームストロング砲	二八一
年譜	三三四

アームストロング砲

薩摩淨福寺党

人騒がせの好きな侍がいた。

元治元年の秋、蛤御門の変のあと、京で長州藩士らしい武士とみれば、市中巡察の新選組が、大根かおがらでも切るように斬っていたところである。

西陣の一角に浄福寺通りという町並がある。

京格子にべにがら塗りの壁、ムコシ窓、といった町家がびっしりと軒をならべ、往来は一間半ばかりのせまさで、露路があちこちにある。

そこへ、新選組副長土方歳三が隊士三人をひきいて巡察に通った。そのとき頭上で、
だあーん

と、屋根を吹つとばすような爆発音が、はじけ渡ったのである。

隊士は、仰天して軒下にとびこんだ。

土方のみは路上に残り、上を見あげている。

「鉄砲だな」

と、二階のムコシ窓を見た。窓から薄っすらと煙が這い出ている。

がらつと格子をあけ、土方は土足のまま段梯子をつたって二階へ駆けあがった。

武士が、箱膳の前にすわって、めしを掻っこんでいた。

薩摩緋に小倉袴、月代をひろびろと剃りあげて、細いまげをのせている。典型的な薩摩者の行装である。

背をむけている。

土方があがつてきたこともわかってはいるはずだが、ふりむきもしない。

男の前に、妙なものが天井からひも一本でぶらさがっている。鉄砲である。

煙硝が、くさい。

「おぬしか、ただいま鉄砲を射ったのは」

「射たん、自然と鳴ったのじゃ」

「身どもは、会津中将様御預り浪士新選組の土方歳三という者である。役儀によっておたずね致す。藩、お名前をおきかせねがいたい」

「ほう」

男は、はじめて土方のほうへむいた。が、つぎに言った早口の薩摩なまりがわかりにくい。

「ひじかたどんちゅうナ、お前さアでござんど？ コヤ、高名なかたじゃ。オイは島津修理大夫

(薩摩侯) 家来肝付又助と言ひ申すが、爾今よろしく」

土方は薩摩藩士ときいて、態度をあらためた。薩摩藩はうるさい。

しかもいま、会津藩と友好関係にある。薩会秘密提携ていけいというえたいの知れぬ同盟によって両藩協力のうえ長州藩を京から追いおとし、先般も京の御所へ武装陳情にきた長州藩兵を、蛤御門で銃火をあびせて潰走かいそうさせた主力は、会津と薩摩である。幕府も薩摩藩の動向に神経をつかい、腫れものにさわるようにしているから、土方も一応の敬意は表せざるをえないのである。

「しかし、なぜ鉄砲をお射ちなされた」

「なんの、胆きんを練きって居もした」

と、吊り鉄砲を見た。

吊りひもを加減して、鉄砲の筒口が、ちょうど肝付の胸にあたるようになっていた。

肝付のいうところでは、薩摩にはそういう無茶な胆だめしがあるらしい。

みなで輪になってすわり、鉄砲を天井から天秤てんびんのように水平に吊りさげて、火縄をつけ、火縄の火が燃えすすめば火蓋ひだに点火して轟発こうはつするように仕掛けておく。

その上で鉄砲を、ぶーんと廻転させるのである。ぐるぐるまわるうちに、やがて火がついて、ぐわあんと弾がとびだす。たれかが死ぬ、いや死なぬともかぎらない。

「それを、座興に一人でやって居もした」

「……なるほど」

さすがの土方も度肝をぬかれたが、それでも苦い顔をして、

「皇城のもとで鉄砲を発射なさるのはいかに胆試たんしとはいえ、いかがかと思われる。今よりはおやめなさるように」

「ああ、やめもそ」

背をまるめめしを食いだした。

あとで、肝付又助は、その家のあるじに金を渡して、軒下を出た。むろん、新選組へのいたずらのために、二階を借用しただけのことである。

又助の宿陣は、眼と鼻のさきにある。

浄土宗別格本山浄福寺である。

もともと徳川の隆盛期には、大名が京都朝廷に接近するのをおそれ、京に大規模な藩邸を設けしめなかったばかりか、大名が京に立ち寄ることさえ禁じられていた。が、いまはちがう。

正式の京都守護職である会津藩は挙藩、京に駐留しているし、禁裏守護を命ぜられている薩摩、土佐、水戸、備前、阿波、肥後、仙台、因幡の諸雄藩は、京都藩邸を何らかの方法で拡張して多数の藩士を収容していた。

薩摩藩では、錦小路（現在・京都大丸裏）にふるくから藩邸があつたのだが、これでは足りないため、現在の同志社大学のあたりに二本松藩邸を造営し、さらに聖護院にも邸地をもとめ、それだけでなく、衣笠山のふもと小松原の土地数万坪を買いとってここに火薬庫と練兵場さえ置いた。この火薬庫が、のちの鳥羽伏見の役を勝利にみちびいたといわれているものである。

まだ藩邸が足りないというので、東洞院蛸薬師下ルの町家を買いて、藩士を収容した。この町家に、薩摩藩きつての暗殺の名人「人斬り新兵衛」が住んでいたことは有名である。

それでもまだ不足であつた。だからこの西陣の浄福寺の客殿、本坊などが借りあげられたのである。

この浄福寺を寮としているのは二十人ばかりの下級藩士で、年も若く、妙に乱暴者ばかりがあつまつた。自然たれがいうともなく、

「浄福寺党」

という異名いみよでよばれた。そのなかでも無類の乱暴者が、この肝付又助である。あごが長く、ひょうたんのような顔をしている。

「新選組バ、おどしてくれたど」

にこにこして、すわつた。「もつとも閻鉄砲でおどしたけん、オイも運がわるか者ならあいで一命落とすところじやつた」

「そやア、面白かこツじやつたな。しかしオイは黒谷本陣くろたにで立小便したど」というのもいる。

黒谷は、これも浄土宗の本山の一つで金戒光明寺こんかいこうみょうじといい、会津藩が本陣をおいていた。この門前へ薩摩の浄福寺党が出かけて行つては喧嘩を売るのが、毎日の習慣のようになっていた。筒袖つつそでに短袴、いわゆる兵児へこのいでたちでかれらは門前にゆき、大刀をひねりあげて、

「会津もーん」

と一声高く叫ぶのだ。

門前では会津の連中がむらがついて、眼を吊りあげ、齒を食いしばっている。

薩摩がののしる。

会津もまけずにやりかえす。ただ双方、方言がひどく、互いになにをいつているのかわからな
い。

先日も、会津藩公用方（京都外交官）外島機兵衛が、三本松の料亭に薩摩藩京都周旋方しゅうせんの者を
まねき、浄福寺党の乱暴を訴えた。

「尊藩において諭示くださらねば、ゆゆしき大事が出来しゅつたいたす」

と、文語調でのべた。候文まがい言葉をつかわなければ、互に通じないのである。むろん
こまかい感情を表現することができないから、要求が紋切り型になり、薩摩側も他藩に叱られた
ようになつこうで、いい気はしなかつた。

善処する、と約束して、きのうも京都藩邸から目付が二人説論にきた。むろん、形ばかりの説
論である。ただそのとき、目付についてきた周旋方の高崎左太郎（のちの正風・男爵）と、藩の
兵学者伊地知正治（のち、東山道先鋒参謀・伯爵）が、「会津とはやがてはどうなるかわからぬ
が、いまは協調せねばお国（薩摩藩）のために都合がわるい」といった。

この一語が、若い肝付又助のかんにさわつた。あとでなかに、
「なんの、コヤ、お国のためじゃ。いよいよ会津バ、やらずばなるまい」

と、いった。だからこそ、毎日きまつた時間に浄福寺通りを巡察してくる新選組隊士を鉄砲で
からかつたのである。

又助は本来の茶目なのか、一種の政治思想をもっていたからこういうことばかりやったのか、

謎といっている。ただ、薩摩人としては、長州的な過激主義者で、蛤御門で敗退して幕府、会津藩から朝敵のあつかいをうけている長州藩にひどく同情している。藩の重役が、長州憎しのあまり「敵」であるはずの会津と手をにぎったことが、かれの氣にくわない。

——仲悪うさせてやるんじや。

というのが狙いで、会津藩士や新選組をつかまえては、事件をおこしていた。

二

起すたびに、そのつど顔つきの大きな事件になってゆく。前回より小さな事件をおこすのは、自尊心にさわるのかもしれない。

薩藩は、御所の九つの門のうち、乾御門を受けもっている。又助はその後数日たってから夕刻、御門の詰所にいた。

ふと、門外の路上を、巡察中の新選組隊士が四人、隊の制服羽織をはおって通りすぎてゆくのをみた。

又助は、すつと門外へ出てあとをつけた。

北へゆく。近衛屋敷の角を東へまわって今出川通りに出た。右手は近衛屋敷の堀、左手は、藤谷、冷泉、山科といった公卿屋敷の門がつづいている。人通りはない。

ひよい、と新選組の前に出た。隊士の顔をのぞいて、